

江戸時代 - 元禄 (1688年-1704年) の終わり頃、一中節<sup>いちゅうせつ</sup>という浄瑠璃の一種の音曲が京都に誕生しました。一中節は風雅で叙情性にとみ、多くの人々を魅了しました。その創始者である都太夫一中<sup>みやこだゆういちゅう</sup>の門弟であった都国太夫半中<sup>みやくにたゆうはんちゅう</sup>は、後に師から独立して宮古路豊後<sup>みやこじほう</sup>と名を改め、豊後節を創始し、門弟を引き連れて活躍の場を江戸に移します。豊後節の心中事件を脚色した作品や扇情的な語り口は忽ち評判をよび、江戸中の人々を熱狂させました。

しかし、豊後節は公序良俗に反した恋愛を助長し、心中事件の横行を招くものとして、江戸町奉行の御布令により、劇場への出演や自宅での教授までもが禁じられることになりました。その後、豊後節の門弟たちは生き残りをかけて常磐津、清元、新内などに独立、分派し、それぞれに発展を遂げて今日に至っています。

街頭での演奏は「新内流し」といわれ、太夫が本手<sup>ほんて</sup>として主旋律を弾き語り、相方は高音域<sup>うわちようし</sup>の上調子を弾き、二人一組で歩きながら演奏し、客に呼ばれると座敷にも上がり演奏しました。

本手と上調子の二挺が絡み合う艶やかな三味線の音色と新内語り独特の粋な節回しは、新内の大きな特徴です。

以前、私が弾いた新内の三味線を初めて聴いたお客様の一人が、私に「甘い音がするね」とおっしゃったことがあります。また評論家の平岡正明は、新内の真骨頂を「骨を噛むような切々たる哀切」と評しました。そうした甘く、切ない新内の調べは、そのルーツに由来します。新内は、座敷や街頭にあった人の生の悲哀の中から生まれ、発展してきました。それは音楽でありながら、人間の心の機微を描く文学として、人の生き様を露にする演劇として、今日まで歌い継がれてきました。私もまた、時代の風情を自身の言葉で紡ぎ、新内の魅力を多くの人々に届けることができれば幸いです。

(新内志賀)



## 新内志賀(しんないしが) 芸歴

京都市生まれ。幼少期より江戸浄瑠璃新内節を研進派初代家元・新内志賀大掾、及び新派家元・富士松菊三郎に師事。

小唄を里園派宗家・里園志寿栄及び里園志寿華に師事。

2012年研進派家元、並びに新内志賀の襲名を果たし、現在は一門の指導・育成に献身している。

本名の重森三果名義では、さまざまな文学をもとに脚色した作品や自ら書き下ろした楽曲を、新しい試みをもって精力的に発表している。また数多くの映画・テレビ等に於いて邦楽指導、演奏出演するなど多岐にわたって活動をしている。

## 壺 一谷嫩軍記 組討の段

いちのたにふたばぐんき

作=並木宗輔  
浄瑠璃=新内志賀 三味線=富士松菊子 上調子=新内志賀口向

平家物語『敦盛の最期』を題材とした新内としては珍しい軍記物で、義宝暦元年(1751年)に人形浄瑠璃として上演された義太夫を新内に移したものです。曲の前半は三味線の合方や語りで、平敷盛と熊谷直実の組み討ちを勇壯に表現し、後半は細やかな節によって、自らの子と変わらぬほどにあとけなさの残る敦盛を手にかねばならない直実の苦悩と、父母を思う敦盛の心を沈痛に語ります。戦のむごさと人の世の無常を表す古典の名曲です。

総合演出= 林海象 (映画監督)

## 弐 月の姫

つきおんな

作=新内志賀  
弾き語り=新内志賀 笛・鳴物=滝本ひろ子 笛=森美和子

能の「三老女」を手本として、今日の生命科学の進歩と生きることの本質を心に巡らせて創作した新内志賀による楽曲です。重い病にかかった女は、この世に一人残される子を不憫に思い、病の平癒を神仏に祈り、不老不死の水を口にします。女は永遠の命を得たばかりに、すべての愛しい縁者にも先立たれ、深い孤独の中でただ月のみを友として語る日々を過ごしています。虫の音すだく月明かりのもと、伴侶や子との来し方を懐かしく回想するも、いずれ訪れる冬には虫さえも落命することを思う。女はあらゆる命を憐み、来る春には芽吹くようにと小さな種を植えると、深い山へと入って行くのでした。月と姫の問答を二管の笛の掛け合いで表現し、三味線とともに演奏します。

## 参 若木仇名草 蘭蝶

わかきのあだなくさ

作=初世・鶴賀若狭掾  
浄瑠璃=新内志賀 三味線=富士松菊三郎 上調子=富士松菊子

初代・鶴賀若狭丈掾の作で「明烏夢泡雪」とともに心中にいたる男女の情話を描いた新内の代表曲です。声帯模写の芸人である蘭蝶は、お宮という女房がいながら遊女の此糸となじみを重ね、お宮が芸者として身売りしてつくった金までも入れ揚げてしまいます。思い余ったお宮は此糸のもとに出向き、蘭蝶と縁を切るよう頼みます。此糸はお宮の胸中を知り、縁を切ることを約束します。しかし、その様子を立ち聞きしていた蘭蝶は、お宮を哀れと思いながらも、お宮への義理から一人死のうと覚悟した此糸と共に心中してしまいます。三者の交差する義理と恋慕の切ない物語を本手と上調子、二挺の三味線が織り成す伴奏で、哀調切々と繊細に、聞く人の心に語りかけます。

演目

### 京都芸術センター

〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下ル山伏山町546-2  
Tel=075.213.1000 Fax=075.213.1004 http://www.kac.or.jp

#### ■ アクセス

- 地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」、22・24番出口より徒歩5分。
  - 地下鉄東西線「烏丸御池駅」より徒歩10分。
- ※ 駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

